



古今和歌選  
頂傳

伊地知文庫  
文庫20  
304  
2





此の御事と云ふは

石を糸人丸乃等より

天牟岩命與大牟島被<sup>イサ</sup>言見始<sup>イサ</sup>謀計<sup>イサ</sup>のわづら  
と云ふは、その事と云ふは、  
Pんが、その事と云ふは、  
みよの事と云ふは、  
の浦と云ふは、  
仲は、  
後、

一、  
朝、  
中、

文選

我出<sup>テ</sup>宮<sup>ヲ</sup>基<sup>テ</sup>為<sup>リ</sup>民<sup>ヲ</sup>為<sup>リ</sup>臣<sup>ト</sup>等<sup>ト</sup>之<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>臣<sup>ト</sup>等<sup>ト</sup>

義<sup>ニ</sup>用<sup>ハ</sup>之<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>臣<sup>ト</sup>等<sup>ト</sup>不可<sup>レ</sup>改<sup>ム</sup>

一、  
一、  
一、





其の如く所...  
は...  
...  
...  
...  
...  
...

一自...  
...  
...  
...  
...  
...

一相...  
...  
...  
...  
...

一...  
...  
...  
...  
...

一...  
...  
...  
...  
...

光二二六ののむかひに  
阿妹那毒那も亦波る迦宇那迦路毒王西  
弥俱丁毒迦阿那王波那弥多你補之那  
羅頂阿也松も迦路那

此方わの毒なむむむのむかひに  
かえきむむのむかひに  
つとまへのむかひに  
ひくまへのむかひに  
てのむかひに

二書名に波毒のむかひに  
阿のむかひに  
妹那毒那のむかひに  
のむかひに  
つとまへのむかひに  
あまのむかひに  
えむかひに  
光のむかひに

とて人の心もさかたけしうとておれりしは  
其れより多しつゝおれりしはさかたけしうとて  
神代よりおれりしは

中三千甲板神の事

おれりしはさかたけしうとておれりしは  
おれりしはさかたけしうとておれりしは  
おれりしはさかたけしうとておれりしは  
おれりしはさかたけしうとておれりしは  
おれりしはさかたけしうとておれりしは  
おれりしはさかたけしうとておれりしは  
おれりしはさかたけしうとておれりしは  
おれりしはさかたけしうとておれりしは  
おれりしはさかたけしうとておれりしは  
おれりしはさかたけしうとておれりしは

歸命本覺身法身 常住妙法蓮臺

本末頁三十一二 二十七尊心懺

此文上をいふは中は蓮花布し御えり

中四 六義の傳事別是事者

中五 天之岩戸事

天之岩戸事は天よりしりしは  
傳事之入は國天香殿山中段れ山名屋  
そのいふは蓮花布し御えり  
そのいふは蓮花布し御えり  
そのいふは蓮花布し御えり



何れも...  
神楽...  
何れも...  
中...

あし...  
あし...  
あし...  
あし...  
あし...

あし...

あし...  
あし...  
あし...  
あし...  
あし...  
あし...  
あし...  
あし...  
あし...  
あし...

あし...

あし...



人の心もあつて國強はるゝと云ふ人の心新に  
くして服再各古身意の六段と成ると豊國はさ  
と名に中火方と水陽の二に木火土の六陽を以て  
二陽の力と中火之神と成るや中火の神と云  
はに事あるにいふ事女の形なりしに成るや  
中火の事成るに云ふ事いふ事なりしに成る  
才七の事なりしに成るに云ふ事なりしに成る  
て思ふ事なりしに成る

中二比神 女代の事

天照大神 五帝より 天忍徳自身尊

及代 四百廿二年

彦火瓊杵尊 彦火を出其尊

殷代 六百廿九年

鵜葺草葺不合尊 周之代初より上

天比瀨瀨命至神武天皇 一五七九年

七百廿六年

中三王比神 國之頭給事

海原彦宮 國之彦宮 元祚宮 國強徳を富

鳥海宮 豊原宮 出羽国

志賀田宮 ウー十二宮 河内国

志賀手宮 大和国

外宮 大戸之邊 大和国

兼曾祢宮 大和国

国津社宮 大和国

山邊宮 大和国

津熊野宮 大和国

山宮 大和国

寺尾宮 大和国

国上郡宮 大和国

粟津宮 大和国

階手宮 大和国

任古宮 大和国

石田宮 大和国

赤石宮 大和国

とらぬをれそ十二初のおわをけくみまをさるをさる

ちと歌ふてまひくさるを歌ふて代は傳ふ

まはるの共相傳を連てくさるく人のあは

日本國の島々

一 淡路國 二 日向國 三 阿蘇國 四 大和國

五 淡路國 六 仙居國 七 仙居國 八 仙居國

中又日本國事

以國を中しるるを志を傳ふる出るるちちち  
路を此處通那し若くは別あはれは深淵通也

石如米遍一切處作大慈用と云文心は世間の  
 四列のやうに安んずるも冥冥佛をえ思ふも大の  
 目十方には安んずるも冥冥佛をえ思ふも大の  
 昔に安んずるも冥冥佛をえ思ふも大の  
 比を身後天竺の東北の角にありて海山あり  
 此のいづらんをぬん一沖をぬん海山の  
 多る海山ありて安んずるも冥冥佛をえ思ふも大の  
 有るなりしをぬん天竺の角にありて海山あり  
 といふ一海山ありて安んずるも冥冥佛をえ思ふも大の

といふ吾國を華本と云く洋を川上多の村を云て  
 といふがやうて安んずるも冥冥佛をえ思ふも大の  
 といふは八のやうに安んずるも冥冥佛をえ思ふも大の

- 一 大隅國 霧山
  - 二 大和國 御嶽
  - 三 能登國 雲山
  - 四 伊弉國 石山
  - 五 佐々國 大山
  - 六 陸奥國 富山
  - 七 加賀國 山
  - 八 甲斐國 白根嶽
- 是を八のやうに安んずるも冥冥佛をえ思ふも大の  
 といふは八のやうに安んずるも冥冥佛をえ思ふも大の

を言ふは、はつしつん、大のく、が、や、や、や、は、大のく、は、は、は、は、  
二、種、た、  
わ、り、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
さ、り、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
お、は、ら、り、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、

之、然、る、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
二、頁、の、浦、と、名、を、う、る、を、た、た、た、た、た、た、た、た、た、  
四、つ、今、の、伊、豆、の、お、う、ら、り、は、は、は、は、は、は、は、は、  
上、り、之、の、お、う、ら、り、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
ふ、あ、り、し、た、ら、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
内、花、界、大、の、う、ら、り、は、は、は、は、は、は、は、は、は、  
て、玉、垣、階、離、建、を、う、る、は、は、は、は、は、は、は、は、は、

胎元傳の九考より取り取り御宮に生れ到身を如  
来母のころは月輪と名はれ胎界の心象と見え  
少人の心母の心神を母とせば少人亦亦  
上の心と見え今も胎界の心も神と  
まの心と見え

中六考よりきた十経名あり

一 胎元傳の心母の心神を母とせば少人亦亦  
上の心と見え今も胎界の心も神と  
まの心と見え

胎元傳の心母の心神を母とせば少人亦亦  
上の心と見え今も胎界の心も神と  
まの心と見え





んえふつひやう十名ころこけりるをくわらう

才七織がしる

只傳ふ昔は履三國方は旅子伯陽とて  
之の遊子用伯陽書之は三人の月とあり  
よるはのそ忘て月あつるは三人と書  
よるはの月あつるは三人と書  
斯て遊子用伯陽のりよるは三人と書  
陽をたのむるは三人と書伯陽のり  
んて妙はとては三人の月あつるは三人と書

耳のめいひはきつて月あつるは三人と書  
伯陽のりよるは三人と書伯陽のり  
二心んてはきつるは三人と書伯陽のり  
るのしきそとて月あつるは三人と書伯陽のり  
よるはの月あつるは三人と書伯陽のり  
はの神は七日月あつるは三人と書伯陽のり  
宝とてはきつるは三人と書伯陽のり  
よるはの月あつるは三人と書伯陽のり  
はの神は七日月あつるは三人と書伯陽のり







二十五日... 楊子... 漢書文云

漢兩漸洞興... 傳記頭

髓脈母... 達於後心

昔大周... 男興者

也... 志

曲... 行

興... 花

曲... 曲

曲... 曲

曲... 曲

曲... 曲

曲... 曲

曲... 曲

曲... 曲

曲... 曲

曲... 曲

曲... 曲









天の下の世に... 可平... 始... 西... 4...

昔... 4...

此二... 後...

古...

...

一... 此...

...

此... 一... 亦... 王...

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ

あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ

あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ

あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ  
あまのこころをいかに  
かきとめておくれ



作者之程の序

其年より其子孫へまで  
世に傳へられたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を

神代卷の序  
其年より其子孫へまで  
世に傳へられたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を  
その石の下に埋めたる石を

のよふに決すをふらふと申すに正に侍りて  
河内の人御少なれ和方の風流よりいふに  
神龜元年三月十九日

或後之元年信實元年三月廿二日  
帝大同二年四月九日

才二子と云人の存然を十代流流如家  
才三子と云人の赤人の一人其の一人の事  
六子と云人の事なり  
瀬原と云人の事なり  
今月形と云人の事なり

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
百、  
百一、  
百二、  
百三、  
百四、  
百五、  
百六、  
百七、  
百八、  
百九、  
百十、  
百十一、  
百十二、  
百十三、  
百十四、  
百十五、  
百十六、  
百十七、  
百十八、  
百十九、  
百二十、  
百二十一、  
百二十二、  
百二十三、  
百二十四、  
百二十五、  
百二十六、  
百二十七、  
百二十八、  
百二十九、  
百三十、  
百三十一、  
百三十二、  
百三十三、  
百三十四、  
百三十五、  
百三十六、  
百三十七、  
百三十八、  
百三十九、  
百四十、  
百四十一、  
百四十二、  
百四十三、  
百四十四、  
百四十五、  
百四十六、  
百四十七、  
百四十八、  
百四十九、  
百五十、  
百五十一、  
百五十二、  
百五十三、  
百五十四、  
百五十五、  
百五十六、  
百五十七、  
百五十八、  
百五十九、  
百六十、  
百六十一、  
百六十二、  
百六十三、  
百六十四、  
百六十五、  
百六十六、  
百六十七、  
百六十八、  
百六十九、  
百七十、  
百七十一、  
百七十二、  
百七十三、  
百七十四、  
百七十五、  
百七十六、  
百七十七、  
百七十八、  
百七十九、  
百八十、  
百八十一、  
百八十二、  
百八十三、  
百八十四、  
百八十五、  
百八十六、  
百八十七、  
百八十八、  
百八十九、  
百九十、  
百九十一、  
百九十二、  
百九十三、  
百九十四、  
百九十五、  
百九十六、  
百九十七、  
百九十八、  
百九十九、  
百十、

中四書や人の事 西河院 治天 西粟田 大江

糸巾細言兼澤も粟田強敵も兼宗も  
年以のあんなにわらふとよき程ひ  
しむあまの程ひはなほ人のあはれ  
新話ひもあはれをよむる山あはれ  
所ひは程ひはなほよめたる程ひ  
ひもあまの程ひはなほ人のあはれ  
山あはれもあはれをよむる山あはれ  
多しなる程ひはなほ人のあはれ  
兼宗も粟田強敵も兼宗も

誰人にもあはれはなほ人のあはれ  
よみたる程ひはなほ人のあはれ  
兼宗も粟田強敵も兼宗も  
はなほ人のあはれをよむる山あはれ  
多しなる程ひはなほ人のあはれ  
兼宗も粟田強敵も兼宗も  
はなほ人のあはれをよむる山あはれ  
多しなる程ひはなほ人のあはれ  
兼宗も粟田強敵も兼宗も  
はなほ人のあはれをよむる山あはれ  
多しなる程ひはなほ人のあはれ  
兼宗も粟田強敵も兼宗も

経の母を... 則の心... 亦み... 乃のわら  
きたる... ぬれ... の初... 護... しく

十五 権者くわん云事

傳... 師... 由... 祈... 大... の... 代... 身...  
う... 或... 人... 珠... ぶ... 或... 人... を... 録... 音... しく... 文... 義... 親...  
多... と... も... 世... 身... の... 代... 身... しく... 志... 各... 各... 女...  
即... 去... 井... され... も... り... 印... しく... 天... 竺... 宗... 律... しく... ね... 守... 百...  
白... 糸... 空... 行... 住... 命... 津... しく... 長... しく... 志... 團... の... しく... 志... 各... 各... 女...  
しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女...

志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女...  
新... 帝... の... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女...  
水... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女...  
志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女...  
志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女...

業平中將事

業平... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女...  
才... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女... しく... 志... 各... 各... 女...





此郡五山寺

後代より

此人五山主沖之山主後をふくむるを多事なり  
さるる事なりと云ふ先業をまじせの孫たふ家継  
たうめん今云此人を河内國人の性言初に福徳  
云王山内表先如志輪の位を初ひく女あり  
其家方よりなれぬてまうり法皇の位を初ひく  
其を信の事と云ふ信人其は人ありあはれ  
其を初ひくありては信の位を初ひくあり

此郡五山寺又信出と云ふ自述に信は内書に  
大由山と名づく威勢と婦多しと云ふ山は  
その名をふくむるありては信の位を初ひくあり

古今相傳灌頂次第

此道場をまじりて命を授けし事あり

本尊之次第

住吉明神 天照大神 口傳者

柿中人丸万更傳供菓字六合内赤六合白六合本尊  
前全全九一八錢質拾貫際物五小袖維平足

布五匹 綉一具 溫一十束厚帛  
卅帖雜紙五十帖 角三本 師前錢五貫 漆物  
三小袖 絹五疋 葛一疋 大方一刀 檀香五帖 厚紙  
十帖 雜帛三十帖 白帛五斗 帶一尺 白布三但一端  
本尊御前可包一端 師下教一端 弟子數也  
但如此云 非差量之仁 姑不可授差量之仁者 一畧量  
位高運三有德仁也 共記請文 今書可授差此者 今  
遠祀者 師弟共今生者 蒙天照大神 梓表丸御討後生  
首可通無間之庭也 權但次名也 併



